

1 徳山石の産出近世江戸時代の徳山石の産地は大津島で、寛永元年(1624)10月2日こ、大阪城修築のための98個の石を運んだという記録がある時の江戸幕府から大阪城修理の助役を命じられた長州藩主毛利秀就は、三田尻御船手の乃美兵部をして、大坂城修築の残石

大津島の石を運搬させた。この石は秀就が担当した大阪城二の丸の真側(玉造石垣付近)に使用されたという。

昭和55年に大坂城小天守台の修復工事の際に、この大津島の石の所在が確認された。

石には毛利氏の一文字三星の家紋を略して「-○」の

印が彫りつけてあり、良質と巨大さが誇示されている。

運搬された石の大きさには、幅1丈・高さ1尺と幅7尺5寸・高さ3尺6寸の2種類あり、98個の石の大坂までの運賃は銀14貫479匁

(凡そ3000万円)を要したという大工事で、その負担の大きかった

ことが想定される。これも参勤交代とともに、幕府の大名統制の一端だったのであろう。

なお、この時の残石が山口県博物館前庭・徳山市文化会館前庭と島内3か所の合わせて5か所に点在している。いずれも毛利の家紋である

「-○」の紋章が刻まれている。

徳山藩が本格的に石材の採取に取り組むのは、かなり後の文化年間以

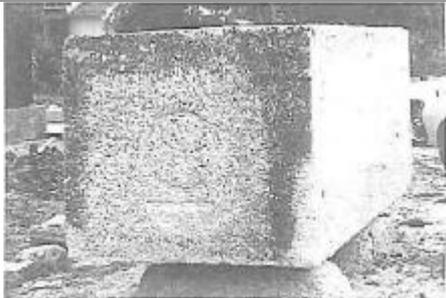
降だといわれ、須万紙の生産とともに、藩の財政の主要な部分を占めて

いたという。大津島の良質の花崗岩は、古くから珍重されて、石棺・鳥

居・灯笼・墓石・石垣などに使用されている。特に近世になると、徳山

近辺はもとよりのこと、かなりの地域の社寺に寄進された石造物が残っている。

大阪城の石垣は勿論のこと、遠く長崎県まで運ばれたと思われる形跡がある。



大坂城修築の残石

